

いま・ここで創られる地域学

-2019 年度鳥取大学地域学部「地域学総説」の現場から-

村田周祐*・稲津秀樹*

Creating Regional Sciences

: Through reviewing Regional Sciences Program 2019 in Tottori University

SHUSUKE Murata*, HIDEKI Inazu*

キーワード：地域学、学際性、超学際性、交錯する知、気づき

Key Words: Regional Sciences, Inter-disciplinary, Trans-disciplinary, Crossing Knowledge Boundary, Awareness

1. 2019 年度地域学総説のテーマと意図

本稿の目的は、地域学の確立に向かって、ゲスト・学生・教員の「知」が交錯する地域学総説の現場の在り様を記述することにある。言い換えれば、いま・ここに地域学という学問が創られていく瞬間を記述することでもある。

2019 年度の新カリキュラムへの移行を機に、私たちは地域学総説の更新と深化を目的に、講義内容・形式を大幅に刷新した。昨年度まで 15 回の講義形式のみで実施していた地域学総説を、形式的に「A」「B」「C」の 3 つに分割しつつも、理論と実践との往還関係のなかにこれらを意図的に位置づけた。そして、3 つの講義に次のような狙いを設定した。

- ・総説 A (必修) : 専門ゼミでの学びがはじまる 3 年前期において地域学のフィロソフィ (地域学の講義として語られてきた知) を学び直す場とする。
- ・総説 B (選択) : A の学びを学生の卒業研究に活かせるように深化させると同時に、教員と学生が地域学の新たな展開を試みる場とする。
- ・総説 C (選択) : A・B の学びをもとに教員と学生が共に地域学の実践的な展開を試みる場とする。

内容としては、座学中心の総説 A とワークショップ中心の総説 B をひと続きの講義として構成している。その発展系として、実践に重きを置く総説 C を設置する形となっている。こうした多面的なプログ

ラムとして構成することで、学生・教員が各々の関心や方法から「地域学総説」と関わる余白を用意することを試みた次第である。

このとき私たちが大切にしたのは、3 つの地域学総説を貫く根本問題とは何かという「問い」であった。地域学との関わり方が多様になればなるほど、それらの底流をなす学問の問題意識こそが重要になると考えたからである。座学のための座学でも、実践のための実践でもなく、両者を有機的に結びつけるテーマを時流に応じて探究していくことが、これからの地域学総説のプログラムに求められるひとつの構えと考える。

新カリキュラムの初年度を担当することになった私たちは、改めて地域学の原論ともなるべき思考に迫るべく、「想像力としての地域学」というテーマを設定した。本学の地域学の知が、「近代の見直し」「反省の学」(柳原ほか 2011) を強調しながら醸成してきたのは、「わたしたちの暮らしの場を大切にしたい」という価値や規範も含めたテーマであったように思う。このテーマを批判的に思考し続けるためには、時代の変化に応じた問いかけ方が大切になってくる。なぜなら「暮らしの場」それ自体が、時代の潮流に応じた変化を続けているからである。

筆者たちのような社会学を専攻する者でなくとも、現代が高度に消費化・情報化しているという時代認識は既に多くの人々に共有されていることだろう。こうした社会構造的な変化を背景にしながら、私たちは、自らの暮らしの場が大変見えにくい時代

*鳥取大学地域学部地域学科

を生きていると言える。そうしたなかで、私たちの足元の暮らしの場へと想像力を働かせながら、どのように地域をえがくことが出来るのだろうか。現代はまた、グローバル化の時代とも呼ばれるように、移動性(情報・モノ・人)が激しい高まりを見せる時代でもある。「いつでも・どこでも」を基調とするスマートフォンやコンビニが世界の隅々まで行き渡り、都市と地方、ひいては国家までが、人の移動の下に相互浸透していく。こうした現代社会において、暮らしの場はそもそもどのようなものとして思いえがかれるのだろうか。そのうえで、私たちはどのように暮らしの場を創りなおしていけるのだろうか。地域という空間の拡がりや社会関係を規定する動向を時代的な特性において捉えたとき、暮らしの場を想像することの困難と課題をめぐり、こうした一連の問いかけが浮かんできたのである。

そこで人びとが暮らしの場を創る営みや、暮らしの場を捉え・えがいていく営みを、学術の世界に留まらない実践者の世界との対話のなかから共に議論してみたいと考えた。そして「想像力としての地域学」というテーマを、今年度の地域学総説の全体テーマとして掲げ、2019年度の講義を構成した(資料I:2019年度地域学総説講義計画)。

以下では、5名の学外講師と2名の地域学部教員が登壇した「地域学総説A」での学びを、教員と学生が悪戦苦闘しながら再検討している様子を紹介したい。具体的には、「地域学総説B」の最終回において、「地域学総説A」にお招きしたゲストの知見とゲスト講義を聞いた学生の知見、そしてそれらを再解釈している教員と学生の知見という、いくつかの「知」が交錯しながら創られていく「想像力としての地域学」の在り様を、ここに記録しておきたい。

2. 「地域学総説B」最終回:「想像力としての地域学—暮らしの場からの再検討」

2-1 教員のあいだで生まれる知①: 地域学のフィロソフィ

(村田) 最終回の授業を始めます。これまでと同じように学生間でのグループディスカッションを最後に設けています。そのグループディスカッションを踏まえて最終レポートを作成してください。今回は「あなたにとっての地域学とは(何か)」がディスカッション、レポート課題のテーマになります。

さて、実のところ、私も稲津さんも皆さんの同級生です。といいますのも、皆さんと「同じ時間」しか地域学にかかわったことがない。つまり、地域学部の3年生ということです。この同級生の2人が考える地域学を、はじめに少しだけお話をしたい。私の地域学とは、より正確な言い方をすれば、私と稲津さんの「あいだ」にある地域学といってもいいかもしれない。3年の間、2人で一緒に地域学の講義にかかわるなかで、2人の「あいだ」に積み上げてきた地域学というものを少しお話していきたいと思えます。

(稲津) 私と村田さんが3年間「地域学総説」を担当するなかで共有してきた知識を、皆さんにお伝えすることで、改めて地域学とは何か、という問いを考える材料にしていきたいと思えます。

まずは、いくつかの基本的な前提、実は「基本」といながらも、今年度の講義では殆ど紹介されていないことについてお話したいと思えます。そのひとつが、地域学という学問そのものが、学際的な視点から成り立っているという点です。これは『地域学入門』でも藤井先生が紹介されている図ですね。

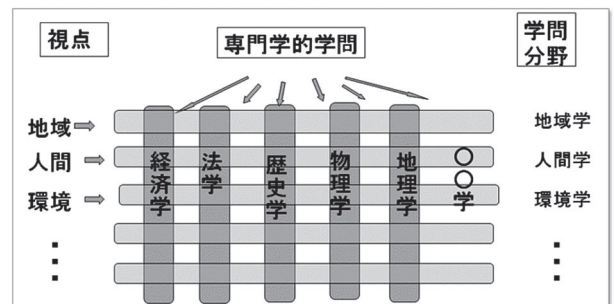


図1. 地域学の学際性(2018年度地域学総説 光多長温先生のスライドより引用)

図1は、もともと光多先生がつけられた図です。恐らく皆さんが1年生で受けた「地域学入門」の講義でも見たことがあるかと思えます。まず、地域学の起こりには、次のような現状認識があるとされてきました。すなわち、社会が複雑化するに伴って既存の縦割りの学問では社会が見通せなくなってきた。そのため、既存の学問を何らかの規範で結合化して新たな学問を創り出す必要があった。この背景には公害被害の歴史をはじめ、他にも国際化やグローバル化といった、地球規模での社会変動の中で、

1つの学問や専門的な知識だけでは物事の解決はもとより、複雑化する事の本質が見通せなくなってしまった。そこで、鳥取大学以外の大学でも、学際系の学部がつけられるようになっていきました。図1のように、経済学、法学、歴史学、物理学、地理学といったような既存の学問を、地域、人間、教育、環境、国際といったそれぞれの学科・コースからどのように統合的に見通せるのか、といったことが求められたわけです。

しかし、近年では、こうした学際的な（英語で言えば）インターディシプリナリーな知識や学問のあり方から、トランスディシプリナリー、つまり、大学の枠を超えた新たな学際性へと知識や学問のあり方そのものが変化していると、昨年の地域学総説で家中先生が紹介されていました。これはどういうことかということ、大学のなかの知識のみで知識、ひいては学問のあり方を考えないという考え方です。これを家中先生は「地域の中で考える、地域とともに考える」とも表現されています。

「学際/インターディシプリナリー」⇒「超学際/トランスディシプリナリー」

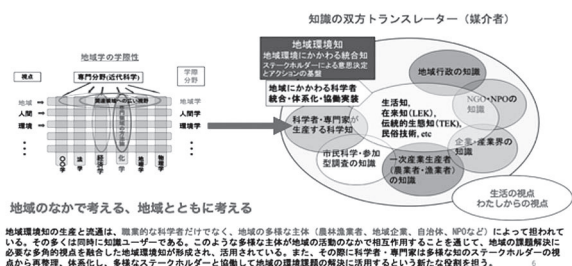


図2. 地域学の超学際性（2018年度「地域学総説」での家中先生の講義スライドより引用）

科学者や専門家が生み出す科学知も、地域の中でつくられている知識からすれば、狭い範囲のことであって、そこにはさまざまなアクター、ステークホルダーがかかわる。地域行政、NPO、NGO、企業、産業界、一次産業の従事者、そして市民科学や参加型調査などで行っている人たちも、大学の専門家集団と同様に知識を持っていて、それを統合する学としての地域学というように、学問のあり方が学際性から超学際性へと変化しているというわけです。

そこで重要になってくるのが、「生活の視点」や「私からの視点」といった、このとき地域学という学を再構成する際に求められる観点です。先ほどの光多

先生の言い方であれば、何かしらの「規範」を持って、既存の学問体系を統合していくということになります。この規範を、どの水準において考えるのが問題となるわけです。ともすれば、バラバラに分解してしまいがちな知識のあり方をどこで・どのようにつなぎあわせるのか、あるいはどのような科学的な基準をもてば、地域学としての議論が成立するのかという点が重要になってくる。このように、学問、ひいては科学そのものへの問いなおしが、トランスディシプリナリーという言葉で言い表される現代的な科学や知の状況なのだろうと思います。

こうした科学と知識をめぐる近年の大きな転回を考えるに当たって、2018年度の地域学総説で講義頂いた新妻弘明先生の議論が参考になると思います。新妻先生は東北で活動されている研究者の方です。新妻先生は2011年3月11日の東日本大震災の被災経験を踏まえた真摯な問いかけから生まれてきた科学論を紹介されました。

原発事故に象徴されたのが、人間社会と無関係に発達した科学技術が自走したり、暴走したりする現実でした。人間の身の丈を超えて巨大化、複雑化、精緻化、専門分化、私物化、要素還元化してしまった科学技術の在り様です。そこには生活者、生命体としての人間や自然との決定的な乖離が生まれている。その結果、マネジメントできない状況に置かれた科学技術に、社会や人間の方を適合させようとするという、いわば逆転した事態が生じている。

社会や人間があつたうえで技術があるのではなく、技術の方に社会や人間を適合させようとする主客転倒が生じている現実を、新妻先生は鋭く提起された

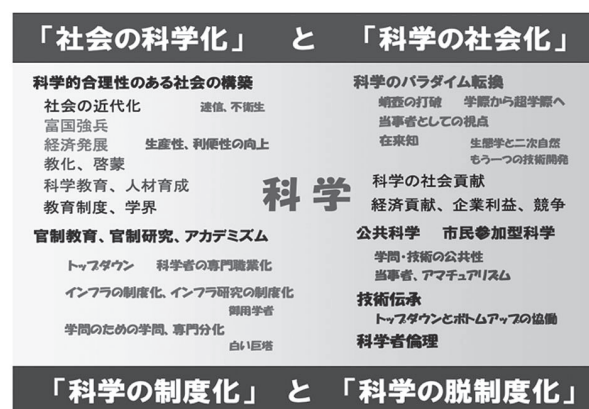


図3. 科学の4類型（2018年度「地域学総説」での新妻先生の講義スライドより引用）

わけです。結局のところ、現在、トランスディシプリナリーという言葉が出てきている背景には、単なる科学の復権ではなく、かといって学際的でもない、研究者以外のアクターも含めた知識の再構想が反省的に求められているということです。

さらに新妻先生が教えてくださったことは、科学観をめぐる大きな変転の歴史があったという事です。まずは社会そのものが科学化したということ。これはどういうことかということ、近代化に伴う富国強兵や経済発展、教化、啓蒙によって、我々の世界が「科学的に」把握されるようになった。要は、科学的合理性のある社会といったものが構築される国家的な動きがあったわけです。けれども、それが徐々に官制教育、いわゆるアカデミズムの閉塞といったものを生み出すわけですね。専門的な教育とか、専門的な知識と呼ばれる高度に複雑化していく文脈がどんどん生みだされていくわけですね。その結果何が生まれるかということ、学問のための学問、専門のための専門といった、社会的分化が生まれる。そして御用学者も生まれてくる。つまり、科学そのものが制度化していくわけです。「白い巨塔」でも書かれていますけれど、まさにバベルの塔のように塔の中でしか通用しない言葉が流通しだす世界ができあがる。

それに対して近年、科学のパラダイム転換、先ほど御紹介したようなトランスディシプリナリーであるとか、あるいは3.11後の世界のことを考えてみるとか、学際から超学際であるとか、学問の蝸壺を打破する必要性が改めて問われているわけです。

また、科学それ自体をどのように捉えなおすことができるのか、そのための議論も進んでいるわけです。その動きを新妻先生は科学の社会化、つまり科学をもう一度社会に埋め戻すという意味で使われている。さらに、公共科学、市民参加型の科学、当事者の観点やアマチュアリズムも含めた技術伝承のあり方を踏まえながら、もう一度科学の倫理を捉え直すという科学の脱制度化、通常の科学の文脈では捉えきれなかった脱制度化が進んでいるのではないかと新妻先生は述べられている。

次に、新妻先生のお話を聞いていて、私がまさにそうだなと思ったスライドをご紹介します。既存の科学知であったり、高校まで受けてきた既存の知識を吸収することであったり、知識を身につけることであったり、クイズ番組のように一問一答の知識を

「正解」する人がえらいみたいな世界観を考えたときに、そこには「知る」ことだったり、「記録する」ことが重要視されている。もちろんこれ自体も重要なことではある。けれども、腑に落ちたり、ハッとさせられたり、自分の体で物事を考えたり、納得するといった思考・感性そのものが科学の発見には実は重要なのだということです。それは「気づき」というようにも言えると思います(仲野2011)。

つまり、客観性や普遍性を高めるなかで知識を私物化してしまったり、自分の言葉を失ったままで他人の言葉で話したり、亡くなった人を糟粕化させていくような知識のあり方ではなく、主観性や個々の感性、生命体や生活者、自分の頭や言葉を介して語るといったことの重要性を、新妻先生は提起されたわけですね。

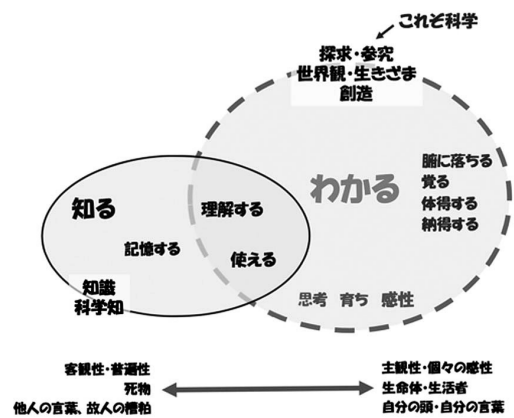


図4. 「知る」と「わかる」(2018年度「地域学総説」での新妻先生の講義スライドより引用)

以上、私たちがこの3年間、地域学総説に関わる中で学んできた地域学のフィロソフィを掴む上で重要と思える議論を幾つか紹介してきました。このように私たちの学んだ地域学のフィロソフィは、大切にしたい観点・価値を有しているということです。それは科学知と生活知を同等に捉えた上で、地域(大学外)からの知識生産の状況を踏まえながら、科学知と生活知との対話から生まれる実践知を重視する学問なのではないか、ということです。そして、その背景には、近代科学への大きな反省があるということ、まずは伝えたいと思います。

では、次に今年度の総説Aと総説Bの狙いについて引き続き村田さんのほうから、私の話への補足も含めてよろしくお願ひします。

2-2 教員のあいだで生まれる知②：科学知と生活知

(村田) いま稲津さんがこれまでの講義資料を上手にお使いになりながら2人で考えてきた地域学の根本について説明してくださった。

さて、地域学を考えるときに、地域学部には重要な営みが二つあると思います。ひとつは私たちが地域に出て行くことです。そしてもうひとつが地域に来てもらうことです。それはなぜかという、生活知というものに私たちは触れたいからだと思います。現場で発動している知ですね。それを私たちが知るためには2つの方法しかない。繰り返しますが、ひとつが地域に出て行くこと。それが2年生の地域調査プロジェクトですね。もうひとつが地域に来てもらうことだと思います。それが1年生の地域学入門と3年生の地域学総説です。それらを通じて生活知というものにできるだけ触れていきたいということなのです。

生活知に触れるという点で、地域学総説Aにお呼びした山舗さんのお話は大変におもしろかった。クラウドビジネスというものは、既存の学問においては、調査対象にはなっても、そこから学ぶということにはならない。山舗さんはハッキングの具体例として、チョコレートができていく過程を一つ一つ分解して、素人でもチョコレートを製造できるようになってく過程を詳細に紹介してくださった。すごくわかりやすかった。じゃあ、なんでこんな大変なことまでしてチョコレートづくりをするのか。それは、ただただ私はサトウキビとカカオだけでできているチョコレートが食べたい、それだけ。私は生活知が生れてくる根源をまざまざと見せつけられたことに、素直に感心させられてしまいました。たしかに、どんなに食べたくても、資本主義のなかに没入している大手の製菓会社はそういうチョコレートはつくってくれない。ゴディバは超高級だけど、私が食べたいチョコレートとは違う。ただ、素朴にサトウキビとカカオだけのチョコレートが食べたい。そしたら自分でつくるしかない。それが出来ちゃうのがクラウドビジネスなんだと山舗さんは言う。たしかに、ネット環境が世界の隅々まで行き渡った現代では、ネットを通じて同じ思いを持つ人々とつながり、クラウド上で様々な情報、資金、顧客を集めながらチ

ョコレートづくりができる。現代ならではの生活知が生産されていくありようを山舗さんには紹介していただいたように思うのです。

さらに驚かされたのは、山舗さんが実存主義の話を最後に持ち出されたことですね。稲津先生が先ほどされた科学知の話につながる話ですね。現代フランス哲学史において実存主義というのは、レヴィ＝ストロースの構造主義 VS サルトルの実存主義という文脈で知識として勉強するわけです。レヴィ＝ストロースが勝ったとか、サルトルが負けたとか、その理由はなんだと言って僕ら科学者は楽しんでるわけです。けれども、山舗さんからすれば、そんな科学史上の位置づけや特徴はどうでもいいことなんですよね。実存主義の考え方、ひとことでいえば「私が世界をつくれるんだ」という考え方。その考え方を山舗さんは徹底的に自分の生きるための哲学にしてクラウドビジネスを創り上げている。科学知と私の考え方・生き方を融合させている。これこそが実践知なんだと感心させられた。生活知と科学知を織り交ぜていく。科学知を実践知に書き換えているとも、生活知を実践知に変えているとも言えるかもしれない。いずれにしろ、それらが現場で融合して世界を創り出しているありように触れたい、そこから学びたいから、地域学部におざわぎゲストをお呼びしているわけですね。地域学総説は、そういうことをやっているのだと思うんです。だからこそ、地域学総説Aにはいろんな領域の現場で試行錯誤されている方をたくさん呼んでくるわけです。

さて、数あるゲストのなかで実践知という点で、私が心引かれたのは松本薫さんでした。作家の松本さんは文学の話をされるのかなと思っていたら、話の中心は実践知についてだったように感じたんですね。僕が一番印象的だったのは、地域学総説Bの松本薫さんの振り返りの回で岡村先生もおっしゃっていましたが、「矛盾していい」という話です。例えば、個人の人権を守らなければならないというとき。科学知から考えていくと、先だって人権というものは存在しないことになります。なぜなら、その個人の人権が守られているのは、その個人を取り巻くすばらしい関係があるからです。その個人の人権を尊重する関係があつて初めて人権が守られるわけです。この話は、去年の地域学研究大会で内山節先生が話されていたことですね。科学的、つまり関

係論で考えれば、いまここにいる稲津さんや僕に人権があるから皆さんが私たちを尊重しているわけではないということになる。皆さんが稲津さんや僕を尊厳してくれる関係があるから稲津さんや僕はここで尊厳や人権を保っていられるということになるわけです。関係論で考えれば、関係の先に人権はないということになるわけです(内山ほか2019)。

ところが、暴力的にその人の尊厳を剥奪するような事態が起きたとする。現実には必ず起きる。そうした状態が起きたとき、個人には人権があると主張しなくてはならない。そうした事態は現実には多くある。ところが、科学的、関係論的に考えればそれは解体すべき論理や対象になってしまうわけですよ。ア priori に人権を人に付与することは、ひとりひとりの個性を消滅させて、全ての人間を同じ米粒のような同質の存在に扱うことなんですね。私たちに個性はないと主張することは大変に暴力的で、科学的、関係論的にはこの論理は解体すべき対象になる。けれども、現実には全ての人間は同質であるという論理で戦わなくてはならない敵がいる。現実的な対処と科学的な思考が矛盾することになる。科学や理念は矛盾を嫌って論理の整合性を整えたがるものです。ところが、松本薫さんは「矛盾していてもいい」と主張される。現実と理念の矛盾を十分に承知した上で主張されている。その主張は科学知と生活知が融合していくことのひとつのありかたを教えてくれていると思うんですね。

例えば松本薫さんは、子供がすごくかわいい、子供が憎たらしい、こうした相反する感情を抱くことは日常茶飯事ですよっておっしゃる。今朝の我が家の三女。コップがテーブルの上に2個置いてあったんですよ。「なんで2個並んでいるの」「なんで、2つは同じ色なの」って泣きわめき散らすわけですよ。そんな理由で泣きわめいて幼稚園のバスに遅れそうになる。ずっと泣いているから、朝から家族全員がイライラしてくる。叩きたくなくなる。憎たらしくなくなる。かと思えば、心からかわいいと感じるときもたくさんある訳です。愛する気持ちと憎む気持ちが入れ替わったり共存したりするわけですね。ところが、科学や理念は論理を整えたがるから、子育ての大変さだけを切り取りだして、母親の人権や社会進出だとか、育児からの解放が大切だとか、社会保障整備が必要だとか主張をはじめ。その一方

では、子供を愛する気持ちだけを切り取りだして、母子愛が強調された教育論が語られたりする。でも現実には、それらは混在して存在しているわけですよ。

ここで松本薫さんに教えられたのは、一方の価値観だけが一人歩きして、肥大化して、社会の「あたりまえ」になって、「女性はこうあるべき」だとか、「母子の関係はこうあるべき」と私たちに降りかかったとき、その価値観とは戦わなきゃいけないということ。その価値観とは戦うべきだと。これは、先ほどの人権の話と基本的に同じ話だと思います。ある価値観がア priori に設定されたとき、例えば母子愛という価値観のみがア priori に設定されたとき、その一人歩きした価値観とは戦わなきゃいけない。けども、現実には、自分は違う、矛盾してしまう。それを十分承知した上で「矛盾していい」と主張される。この考え方は、科学や理念の善し悪しを十分に理解したうえで、それとは矛盾する生きられた現実を承認し肯定していく実践知だと思うんですね。科学知と生活知を状況に応じて組み合わせたり、織り交ぜたりしながら生きていく実践知といえいいのでしょうか。松本薫さんの話の勘所は、こういうお話しだったのではないかと考えています。

Ⅱ-Ⅲ 教員のあいだで生まれる知③：地域学と実践知

(村田) 稲津さんと村田の2人の間で最近の発見、学びは、実践知というのは科学知と生活知が融合したり混ざり合ったりするなかで生れてくるのかなあということでした。それが昨日の発見です。

(稲津) 授業の打合せしながら。

(村田) そう、打合せをしながら。地域学における実践知、生活知、科学知の関係ってこうなんじゃないかなって話していたんですね。それで、いま、松本薫さんや山舗さんのお話をしたわけです。

そんな経緯もあって、地域学総説Bの最終回では、科学知と生活知の対話をというものを考えてみたかった。いまお話ししてきたことが正解かどうかはわからないけれども、いずれにしろ、これまで地域学において、私たちはなかなか実践知といいながら、実はしっかりと向き合わないままに議論を進めてきたように思うんです。

実践知。レジュメには「私たちの暮らしの場をつ

くるための知」とも書いています。この「生きるための知」というのには、他者がそこに存在しているんだと思います。地域というものを考えるとき、現実にはそこにはいつも他者が存在している。ある空間のなかで「他者と一緒に生きていく知」というものを対象化し、描き、学んでいくのが地域学なんじゃないかというふうに思っています。そのために、ここまでゴニャゴニャといろいろな話をしてきたわけですが、これを柳原先生は一言で「私から考える」と表現されているわけです。例えば、がんという病気になったらどうするか。病院に行きますよね。でも病院で治らなかったらどうするのか。がん患者が酵素風呂に入りにくるって話を稲津さんが話していたよね。全く科学的には実証性がないけれども、たくさんの方が酵素風呂を求めてくるって話。

(稲津) 実証性はない。

(村田) 実証性はないけど、治るんなら、酵素風呂に入るでしょ。がんが治る祈祷とか、ゴマを焚いてもらって治るなら行くじゃない。話は変わるけど、うちの町内でも空き家が増えてきた。大学に行って勉強すれば空き家をなくす方法を習得できると思う？それは無理だよ。その町内で昔の話を聞いてみたり、先進事例地から先人知恵を拝借したり、大学に行ってみたりする。科学知であろうが、生活知であろうが、それらを取り混ぜて自分たちの知を創ると思うんですよ。実践知を。実は、今日の話はすごくシンプルにすれば、そういう話だと思います。そのために、地域学部は、手がかりとなるゲストをたくさん呼んで話を聞いて学ぼうとしているんだと思うんですね。

(稲津) 少し補足を。ふたりの日常の会話の中で病気やがんの話をしている中で、酵素風呂の話になったと記憶しています。がんが治るかどうかは、本当かどうかはさておき、この酵素風呂の話は私が実際に目撃した話なんです。その酵素風呂は、近隣県のある肥料農家さんが経営されています。肥料農家さんですから、日常的に米ぬかを扱われていて発酵の世界をずっと見つめてこられた。米ぬかの量も土俵以上というか、今日のこの[60名程度が入る]教室ぐらいの広さが全て糠床なんです。それが小さな丘のように積みあがっていて、その全てが発酵していて、ものすごい熱をもっている。様々な理由で近代医療から見捨てられた、あるいは、近代医療を

見限った人たちがそこに集まっている。それで酵素風呂に浸かるということをやっと繰り返されるんですね。あるとき、その待合室で、酵素風呂をされている御主人さんに、ある女性の方が、「がんマーカーが消えたんよ！」と言ってすごく喜んで話しかけられている場面に遭遇したことがあった。それが果たして万人に通用する方法かどうかわからないし、この僕がたった1件だけ見た事例ががんに対するベストな療法ではないし、がんへの効果は全く保障できない。けれども、そういうやりとりが行われている瞬間に遭遇したという事実はあるわけです。

(村田) 酵素が効いたかどうかは分からない。

(稲津) うん。

(村田) でも、その人は酵素風呂が効いたと思っているんですよ。

(稲津) そう、効いたと思っている。そのような当事者の主観的な世界においてその変化は、少なくともその方にとっては、ものすごくアクチュアルな出来事だったということです。がんマーカーが消えたことが喜びとともに迎えられていた。このように知識というものがどのように実践的に使われていくのか、あるいはどういう知識を信じるのかということが問われたときに、地域学部で伝えられるさまざまな学問の知識や、生活の知、実践の知、それらをどのように結びつけるのか。そして、それらがいかに自分自身にかかわるのかといったことは、偶然性に左右される部分も多くあるかと思います。

他方で、冒頭に紹介したように、学際化を内包しながら超学際化していく地域学は、学問としての規範をどのように設定するのか。つまり、個人にとってのときどきの状況、あるいは文脈に依存するだけではなく、そこに何かしらの基準はないのかということが、地域学という学問に付きまとう課題となるわけです。これまでの議論に照らしたとき重要になるのが、それは「わたし」を介した地域への「気づき」にあるのではないかと思います。新妻先生のスライドでも「わかる」と記されている範囲、共同主観性とも言い換えられそうな、この円の範囲をつくっている「気づき」をめぐる判断が、一体どのようにしてなされているのかを、まずは個々人の知見に探っていくことが重要になるかと思います。

Ⅲ-I ゲストと学生のあいだで生まれる知②：最終レポートから

(稲津) そこでここからは、皆さんの記された「地域学総説A」の最終レポート内容を題材に進めていきたいと思います。ゲストの講義を受けて、皆さんの「気づき」に関わる記述の紹介を通して、地域学という学問をめぐって、少なくともこの2019年度の総説Aで問われたこと、そしてそこから生まれた気づきは何だったのかを考えたい。履修者全員の内容を取り上げることは時間上できませんけれども、幾つかご紹介させてください。

学生のレポートより(1)

この方は、総説Aの講義で問われていたこととは何かということ、かなり抽象度の高い水準で、ぎゅっと圧縮したミックスジュースのように要約してくれています。村田さんと2人でこれは僕たちにも書けないんじゃないかと言いながら読んでいました。では、紹介します。

それ〔地域学総説Aの講義：引用者補足〕はつながりを取り戻すための方法論だったんじゃないかということです。第1回目の藤井先生の講義から最後の講義まで一貫して言われていたと感じたことは、社会の変動、すなわちその時々社会が求めている要請と各々の地域の空間とを相互的に対応させていくことで、地域を時間的にも空間的にもつなげ、広げていくことができるということでした。その際に重要なことは、実際にその地域に暮らす人々が何を大切にしているのかを把握した上で、変遷の中で失われてしまったものを本来のように取り戻すことができなくとも、新たにその社会は自分の中で再解釈し、つなぎ直していくという意味でのつながりを取り戻すということがある。そうすることで誰もが人として生きやすい状態が地域において実現されていく。そして私は今回の地域学総説講義でのお話は、そのための一種の方法論の紹介であったのだと考えています。

まさに、先ほどから村田さんが人権の例で話していた話も、がん治療の話も、まさにこの方法論の探求という話ですね。知識を人々が生きる糧や方法にどのように結びつけるのかということと、すごく

かかわる話です。

つまり、地域学の根本課題のひとつは、人々が「つながりを取り戻す」際の方法論を明らかにすることではないかということですね。そこに学問としての「気づき」がありそうだといい。他方で、次の方は地域と切り離された「わたし」への気づきということで、次のように記してくれています。

学生のレポートより(2)

頼瀬さんの講義を受けて、これまでの自分の暮らす地域に対する見方はもしかしてメディアの中の話と同じ見方なのではないかと考えさせられた。これまで私の暮らす地域に対する見方は自分の地域の暮らしから見えてくるのではなく、ほかの地域と比べたときに浮かび上がってきた地域の姿を見ていた。地域行事やまつりごと、地域間交流などの物理的な有る無しの比較をし、ないものねだりをし続け、自分の地域が劣っているという意識と他地域への羨ましが募るだけで自分の地域に対する思いは悲観しかなかったように思う。これはほかにある地域内行事や交流が自分の地域にはないという問題だけを切り取り、自分の地域にあるものや暮らしの観点には一切目を向けていなかった。また、暮らしの場であるはずの地域から自分という個人を切り離して考えていた。この見方がメディアの見方と重なったのだ。偏った見方をして地域と向き合っていたのかもしれないとこのとき気付かされた。

地域を捉える認識において、「自分という個人を切り離して考えて」しまうことで、「メディア」の見方と「自分」の見方が重なっていたのではないかと思います。こうした気づきが記されていたかと思います。こうした方が、実はこの学生さん以外にも何人かいらっしゃって、とても興味深かったですね。

では、このように「わたし」という存在を地域に置いて考えたときに何が見えてくるか。「動き続ける、変わり続ける地域と私」ということで、お二人のレポートを紹介したいと思います。この方も頼瀬さんの講義を受けて次のように述べてくれています。

学生のレポートより(3)

問題に焦点を当てるのではなくて、人を描くと語られたときに、私は今までそこに暮らす人を見てい

なかったのではないかと気付かされた。地域の問題、少子高齢化や人口流出、子育て問題や未来を担う若者などのワードに意識が向き過ぎていたのではないかと思った。私の暮らしの場はこれまで・これからについて考えてみた。私の暮らしの場は小学生の頃から大学生になった現在まで生きてきた場だ。昔は友達と公園の中を全力で走り回って遊び、田んぼからカエルの声が賑やかでよかったのに、今は家で子供は遊び、田んぼはなくなってしまった。私自身はピアノを習っていたため、毎日演奏の音が近所に聞こえていただろうが、今はやめてしまって聞こえなくなったことは地域の変化なのだろう。今でも近所のピアノ教室から聞こえる音、毎日のように窓際に腰掛けているおばあさんなど変わらないものもある。しかし、いつか変わってしまうのだろう。この変化する地域の中で私も暮らし、御近所の方と挨拶をしたりして地域の中の一部になり続けることが地域を存続する方法なのではないか。

社会や時代の変動もあるかもしれないし、身近なもので消えていくものもあるかもしれないが、地域に存在し続ける意志そのものを地域学の方法論へと変えていく。この方のレポートは、「暮らす人を見ていなかった」ことへの反省とともに、「私」の目線から地域を描いている。他にも次の方は柳原先生の講義を受けてこのように記しています。

学生のレポートより（４）

子供時代は中山間地域にある村で育った。中山間地域の問題について序列された後に、住み慣れた地で暮らし続けることが難しくなってしまう、いずれは村全体がなくなってしまうかもしれない。しかし、どんな小さい村でもその裏側に長く存在し続ける文化や歴史がある。その先祖代々暮らしてきた地域を守り、将来にわたって希望を持って暮らし続けたいと思う人は必ずいる。その対応策が自分の過去の経験の中に実はあった。困りごとに対して地域住民が立ち上がり、閉店するお店を地域で買い取り、住民が店員となり、商品の販売や配達をすることで不便な暮らしにならずに済んできた。そして町の中心部に図書館や郵便局、診療所、直売所がまとまった道の駅ができ、そこまではコミュニティバスで行って一度に用事を済ませることができるようになり、

生活が便利になってきた。

また、廃虚となったところを料理店に改造し、地域を訪れる客に郷土料理を提供し、一人暮らしの御老人に配食サービスを提供する可能性もあった。これらの取り組みで、ただ村の暮らしを維持するだけではなく、住まわれる方がいきいきとして村に活気があるように感じてくれることが大切である。このような身近な話をよく耳にしたが、地域を見る視点も持ち歩き、まずは自分の足元をよく見てみよう。自分の責任の持てる小さな世界にしっかりと向き合おう。そこから大きな世界への視野を広げていこう。また、客観的・構造的視点を取り入れ、地域の長い時間に蓄積してきた現在と未来に深くかかわることに対し、その間にある変化を開かれたものとする移動の視点も不可欠だろう。

こちらは留学生の方の文章ですが、このような記述にふれたときに、地域学で捉えられうる地域が、いわゆる「日本の地方」だけではない地域をもえがきうることが、ここから学べると思います。先ほどの方の経験と全く別の外国で育った方のご経験は、実は、地域の描き方という点において、深く結びついているように思います。「わたし」の観点から見えてくる地域観、自らにとっての地域に佇むことで見えてくる風景や住民の暮らし方への気づきが、これらの記述から感じられました。

学生のレポートより（５）

他にもいま地域で起きていることを考えるとき。「ウチ、ソト、ヨソ」が混ぜこぜになっているという話をしてくれた方がいらっしゃいました。この方はいわゆる都会に住まれてきた方だそうですが、これまでの暮らしぶりとの対比から、智頭町での経験を次のように考察されています。

瀬戸内監督のインタビュー記事で祝島の人々は運動会で島出身の子供だけではなく、全部の子供を全力で応援するというお話があった。祝島の人々はウチとソトの境目が曖昧でその範囲は広いものであり、対して現在つながりが希薄とされる人々はヨソとソトとの境目が曖昧でその範囲も広いものだと言える。先ほどの事例に当てはめると、多くの人の場合、運動会では自分の家の子供、ウチだけ

を応援し、同じ地域の出身の子供（ソト）やほかの地域の子供（ヨソ）に対して無関心、恥じらいなどの感情が立ち上がり、見ているだけで応援はしないだろう。

私がつながりをもう一度つくるためによりよい案で考えるのが、いっそのこと、ウチ、ソト、ヨソを混ぜこぜにしてみたらどうだろうかというものである。例えば私は大学生になってから、毎年智頭で留学生とともに行われる田植えのイベントに3回参加した。そのイベントでは本来交わることはなかったはずの智頭の住民ウチ、鳥取の生徒や学生ウチ+ソト、留学生ヨソが話をしたり一緒に食事をしたりする。私は智頭に愛着がわき、もう10回以上智頭を訪れている。そのような機会があちこちでふえていけば気が付いたらつながっているのではないかというふうに考える。

他にもこれに似た感覚で「ウチとソトとヨソ」が混ぜこぜになった世界として地域を生きていこうとしている方のコメントをご紹介します。この方は松永さんの講義を受けての論述です。

学生のレポートより（6）

松永さんの話を受けて、では私が普段の生活の中でこれから何を行っていくかを考える。国連のUNHCR協会のホームページを見て自分にできることを考えてみる。UNHCRの活動の中で難民と進む20億キロメートルというものを見つけた。これは世界中の人々と共に歩くことで、難民の人々が生き延びるためには安全地にたどり着くまでに味わう苦難を理解し、同じ世界に生きる仲間としての連帯感を感じる目的とするキャンペーンである。

このキャンペーンは、自分のダウンロードしているフィットネスアプリと連動させることで自動的に距離が換算される。私は最近ウォーキングやジョギングを定期的に行っているののでいい機会だと思い、キャンペーンに参加した。キャンペーンをする中で、世界に人々と結果をシェアして一緒にウォーキングする友人にもこの活動を宣伝して難民問題への関心を深めていきたい。そして鳥取大学の留学生との交流についてのお話があった後、そこから難民問題との距離感を縮めていけると思う。

目の前に難民がいなくても難民と共に歩いている感覚を日常に持ち込むための技術として、みなさん世代にとってのスマホアプリがあるようです。先ほどの方は、智頭の交流のお話から議論していましたが、ここでもウチとヨソとソトが混ぜこぜにしながら、「彼ら」と共に歩く感覚に接近しようとしている。他者を感じると想像力を高めるために技術を使い、「わたし」としての地域と、「彼ら」としての地域を結び付けようと試みているところが興味深いですね。

学生のレポートより（7）

他者と関わる際に生まれているものとは何でしょうか。この方はまさに「出会い」から生まれる創造性や新しい価値観について、ご自身が所属している演劇のワークショップのお話から紹介しています。

私は和歌山県和歌山市の出身で和歌山演劇大学というワークショップに中学2年生から現在までいて、5回参加した。このワークショップはアマチュア・未経験者・初心者を対象としており、老若男女さまざまな職種の人が約半年間通じて1公演をつくり上げていくものである。この演劇経験で私は中学高校生活だけでは出会うことのなかったような年配の方々と、地元のアマチュア劇団の主催者と交流を持つことができた。第3回の講義、松本さんの講義は普通という呪縛がテーマである。松本さんは普通であることは時代の枠組みや制度に飲み込まれてしまう怖さがあると考えている。また、そのように飲み込まれてしまわない力を養う場所として、大学をはじめとした学ぶ場所が上げられると松本さんはおっしゃっている。ここで学ぶことのできるものとは、人間一人一人が持っている価値観のことではないかと私は考える。自分の中にある価値観とそこで学んだ価値観を対比することで、普通という呪縛から距離を置いた新しい価値観を形成できる。和歌山演劇大学ではその年齢層の広さからもわかるように、クラスの友人たちとは全く異なるバックグラウンドを持った人々が集まっており、それぞれの持つ価値観も異なっている。

私が濃厚な時間と感じたことは、約半年間かけた1公演の創造過程を通して自分と異なる価値観を学び、自分の中で新たな価値観を形成することができ

たためだと考えている。そしてそれは少し飛躍した考えかもしれないが、新たな文化の創造も可能にするのではないかと思う。

先にウチとヨソとソトがごちゃ混ぜになる話がありましたが、この方は、まさにこれらがぶつかりあいながら生まれている、新しい価値観や創造性を感じ取っている。その点がとても印象的でした。

学生のレポートより（8）

このように「わたし」の気づきから考えていくと、やがて大切にしたい場所や空間とは何かを再発見する過程が生まれてくるようです。次の方は、山舗さんの講義を踏まえながら記されています。

私の暮らしのこれまでは地元と鳥取の生活である。私はこれまで自分と地域の間を考えたとき、ただ住む場所が鳥取に変わったというだけで特に生活に変化はなかった。そのため、鳥取という地域に溶け込もうとか、近所に住む人たちとのつながりはあまり考えてこなかった。しかし、カフェが私の人や地域とのかかわりを広げてくれたことを、講義を聞いて気付くことができた。私の地元は城下町でその雰囲気に合わせてカフェも最近では多く見られるようになった。場所という空間とその景観に合った建物には強い関係性があるのだろうと講義を通して考えた。その土地の景観を壊さずに新しいものを取り込むことはリスクのあるもののように思われるが、ある一定の需要がある層を狙いその層の人たちに受け入れてもらうことができれば、それは成功したと言えるのではないか。私の生活の一部にもカフェで過ごすことが含まれている。そこは私に社会的なスキルを身に付けさせ、人とかかわりをつくってくれる場所であり、自分にとってなくてはならない大切な空間である。そのような空間をこれからも大切にしていきたいと思う。

大切にしたい場所、空間と言いきると、少し恥ずかしさを感じてしまうんですけど。例えば「私にとって地域学総説はとて大切にしたい講義です」と言うと、すごく恥ずかしくなるじゃないですか。でも「大切にしたい」という感覚を、「人とかかわり」の中でもう一度確かめ直しながら「社会的なス

キル」を感覚することは。先の「ウチとヨソとソト」が混ざり合う現実を踏まえても重要だろうと思われまます。それがこの方にとってはカフェという場所が、そして他にないそのカフェを用意している空間が、地域を想像する上で重要な気づきを与えてくれたところだったということでしょうか。

他にも時間の関係で詳しくご紹介できないですけど、こうした文脈で丹間先生の学校統廃合に関する講義に言及した学生さんがいました。学校統廃合の結果生まれた八頭町の隼 Lab. の取り組みについて、実際の運営現場に入りながら活動している学生さんによるコメントです。活動の現場に入りながら、隼 Lab. が地域住民にとっての場として生まれ変わることが自らにとっての望みでもあると記してくれています。自分自身の関与している場所への望みや願い、それは地域への希望とってよいかもしれませんが、それも「大切にしたい」と思える場所や人間関係への気づきを通して生まれてくる。そうした発見の過程を記してくれていました。

学生のレポートより（9）

では、そうした希望を生み出す地域の源泉とは一体何なのかと考えたとき、それは他者とかかわりだったのではないかという気づきを記してくれた方がいます。

例えば私が現在暮らしている鳥取県鳥取市の湖山町という地域で考えてみたい。湖山町で暮らし始めて今年で2年以上経つが、自分がこの湖山を動かしていると考えたことは全くと言っていいほどない。しかし、なぜだか常にこの地域は動いているように見える。自分が動かしている感覚を持っていないけれども、湖山は確実に動いている、そう感じられたのである。では、その根拠になるのは一体何であるのか。それを考えるときに気付いたのが自分ではない誰か・何かの存在であり、何も自治会などの住民組織のみに限った話でもないのかもしれないというところまでは考えていた。しかし、私が自分ではない誰か・何かの存在を想像する上で、想像の対象とする範囲が非常に狭かったのだと第2回目の柳原先生の講義を受けながら痛感させられた。

柳原先生の講義の中で、他者との関係という言葉が出てきた。この他者という言葉にこそ、地域を動

かす自分ではない誰か・何かを明らかにするヒントがあったのである。柳原先生は他者とは他の人々だけでなく、自然や死者、歴史なども含む人の生にかかわる全てのものであると定義されていた。人の生にかかわる全てのものが集まったものが地域であると考え、その地域を動かしているものは、それらとの関係やつながりを取り戻そうとする人間一人一人の命である。つまり、一人一人が命を生き切ろうと他者との関係を結びなそうとしている。その姿が私の脳裏に浮かび、湖山がそして地域が動いているように思わせたのかもしれない。また、私は地域を動かしていないと思っていたが、それは単なる思い込みで、地域に暮らす限りは他者と私との関係は着実にあり、それらの中で生きようとしていることが自然と地域を動かすことにもつながっていたのではないか、という気づきを得ることができた。

この方の観点は、まさに私たちがいま・ここに立っている湖山から地域を想像するときの重要なヒントを記してくれていると思います。自分たちの生が他者との関係を結び直しながら、懸命にもがいている。それが「暮らす」ということであり、その場に私たちの地域があると考えたとき、とてつもなく大きな動きとの関わりのなかにありながらも、実際は自分もその一部なのだという感覚をもてるようになるのではないか。

他者との関係、というときに柳原先生の講義との関連から、「つながりを取り戻す」というメッセージにも言及されていますが、これは『地域学入門』のテキストのサブタイトルでもありますよね。

松本薫さんが講義後に皆さんの質問に対してまとめられたコメントシートに、想像と妄想は意味が違うよということをおっしゃっていました。妄想は本当に個人的な内容に留まるもので、他人にとってはどうでもいい話であると。逆に、想像とは責任が伴う言葉なんだということをおっしゃっていました。想像することは、まさに社会的ななかかわりの中から生まれてくる、それ故に社会への責任も伴う。それこそが想像力なんだということが、この記述から私たち教員が思い出したことです。

学生のレポートより (10)

では、他者の生と在る地域を想像することが、一

体何のために必要とされるのか。最後に次のレポートをご紹介しますと思います。この方は、無知が無責任へと転化してしまうが故に、「つながりを取り戻す」ことの重要性があることを記してくれています。読んでみましょう。

地域学を学ぶ上で何度も耳にするつながりを取り戻すのつながりには、近隣に住む人のつながり、自然、過去や未来、死者とのつながりだけではなく、顔を見たこともないどこかの誰かとのつながりも含まれると考える。私たちの暮らしの場は誰もが顔見知り、情報がすぐに共有されるような小さな地域から名前も顔も知らないどこかの誰かの協力なしでは生きられない大きな地域へと移行している。そこにはその地域の外から移住してきた人や日本以外の国からきた人も一緒に暮らしている。そうした人たちのことを知ろうとしないままの状態にいる無知や無責任が差別や偏見につながるのではないかと。今自分が生きている生活を見直し、知ろうとすることで初めて地域が見えてくる。そして、それがより多くの人と共有する社会へと拡大し、現代社会が抱える問題とその解決に結びつくのではないかと、これまで述べてきた無知と無責任が今すぐ完全に克服できるような簡単なものではないことは理解しているが、しかし、この先の人生をどこで生きて行くにしても、私が無知で無責任であることを自覚する謙虚さとそれを少しでも克服する努力を忘れてはならないと考える。

小さな地域、大きな地域という表現は少し前のコメントにもありました。スケールの異なる世界観が交錯する中で、私たちは自らの立っている場所や見失ってしまうだけでなく、他者の置かれた歴史を見失ってしまいがちです。そこに差別、排除、偏見が忍び込んでくる余地が生まれる。先ほどの方も言うように、他者の生とのつながりを取り戻しながら、地域を想像しなおしていく。それによって、無知や無責任を越えて行く姿勢が生まれていくのではないかと、そうした姿勢と重要性をこの方は議論してくれているのではないかと思います。その絶え間ない「努力」こそが、「つながりを取り戻す」という『地域学入門』のサブタイトルにかけられたメッセージなのではないかと、この方のレポートを読ませてもらい

ながら、私自身が深く感じ入っていました。

以上、皆さんが地域、あるいは地域学について考えて下さったことを紹介してきました。これらは皆さんにとっての「気づき」に関する話だったかと思えます。紹介できなかった方のレポートも含めて、皆さんの文章を読ませてもらいながら、私たち教員も、地域と呼ばれる空間と社会関係を改めて想像しなおす契機を与えてもらったと思えます。

Ⅲ 学生のあいだで生まれる知①

(村田) では、これからグループディスカッションに入っていきます。皆さんのレポートを抜粋しながら提示をした意図は、皆さんとゲストの方たちとの対話の中で生み出された知識に、私たち教員も学びんでいきたいなという思いからでした。ここまで教員のあいだでの学び、教員と学生のあいだでの学びを紹介してきたわけですが、これらを横目に見ながら、「あなたにとっての地域学」というテーマをについてディスカッションをしていきたいと思えます。最終的にはこのテーマで最終レポートを提出していただきます。大変難しいテーマだと思います。けれども、これは僕たちにとっては、ある意味の責任ですね。地域学部にいる責任かもしれません。この機会が地域学を正面から考える最後の機会だと思いますので。ぜひ考えてやってください。では、ディスカッションに移ります。

9つのグループ(1グループ、4～6名)に分かれて学生同士で約20分のディスカッションを実施。最後に、グループの代表者がディスカッションの要約や内容を発表した。

(1班)地域学というものは正解がないものであり、どんな考え方とか、方法を出しても間違っているというふうになることはない。何でも受入れてくれる存在であり、行政、地域住民、学者とか、そんな人々と共につくっていくものであると思えます。また、立場の違いから対立することもあると思うんですが、それを越えて行く難しさがあるからこそ、その相手の立場に立った想像力というものが求められるものだと思います。

また、地域学においては、ちょっと自分の考えが及ばない現場に出てみたり、その感覚を得て生活知

から考えるという点が大切であるという意見が出ました。あと、地域の住民と同じぐらい、よそ者の視点が必要で、それによって問題意識やその地域の良さの再発見が、地域の新たな活性化につなげられるものだという意見もありました。少しまとまらないのですが、地域学をそのような存在だったと、このグループでは考えました。

(2班) まず、地域学から学べることとして、先生方のお話の中にもあったように、地域を分析する視点や、地域をどう生かすかという点を実践されてきた方々の視点や考え方がある。それらを学ぶことに終わるのではなく、それらを自分の中に落としこんで、地域の中で自分自身がどういう立場にいるのか、また自分が改めて地域を見つめ直していく必要がある。そういうことをするなかで、初めて地域学が成立していくのではないかなというふうに議論しました。

(3班) 僕たちの班では、地域学には2通りの解釈があると考えました。ひとつが、人とのつながりを意識して、よい地域をつくるためのもの、よい地域をつくるのが地域学の役割だという考え方。もうひとつが、いい地域学をつくるのが地域学の目的ではない、極端なことを言えば別に地域をよくしようと地域学は考えなくてもいいのではないかと考え方は。つまり、地域という視点より個人の視点で考え、個人が幸福になれば、その地域の個人個人が幸福になっていくことで必然的にその地域は幸せになるという考え方です。

地域学は内実についても議論がありました。地域学の内実には、まず科学知と生活知があると思うんですが、科学知と生活知はどちらも論証をして、その結果が実践として現れてくると考えました。科学知、生活知の違いとして、どちらも論証するという点においては同じで、その論証の仕方が違うだけであるっていうのはこの班の意見です。イメージとしては科学知の論証としては実験室で行ったり、化学室で行ったりします。それに対して、生活知は僕らの生活そのものが実験あるいは僕らの生活、経験、日々の経験そのものが論証なのだというのがこの班の意見です。ですから、僕らの日々の生活が既に実践であるという前提に立って地域学を捉えました。

科学知と生活知が合わさった実践知を生むためのものが地域学で、地域学はその科学知と生活知を俯瞰的に上から大きな視野で見ている。それと同時に、先ほどに申し上げました、個人の幸福を迫及する学問であると考えました。

(4班) 私たちの班では、本当にいろんな意見が出ました。あまりまとまってないんですけど、あえてコメントとすると、私たち地域学部には3つのコース、国際と創造と人間形成というコースがあります。その3つのコースがありますが、それらは地域学部というひとつのまとまりのなかにあって、それぞれの専門性はあるつつも、中心の核になる考えには暮らしとか、社会とか、生活とかがあって、それらについて考えるという根幹は共通しているのではないかと考えました。国際・創造・人間という3つのコースがそれぞれの専門性を高めることで、それらが交わしたときに、それぞれのコースの主観というものが客観に一步近づくのではないかなというふうに考えました。

(5班) 私たちの班は結構ばらばらだったんですけど、個人というのを中心に考えたときに、地域学とは自分の生き方を問い直すことであるという点で議論をしました。自分の生き方を問い続けるものであるっていう意見と、自分が生きている地域に責任を持つことだという意見と、自分なりのつながりを取り戻すための方法論であるという考えが出てきました。それらを取り巻くキーワードとして、物質的ではない地域に目を向けることが必要であるという意見、知識を介したつながりが重要であるという意見、地域を捉える視点が大切であるという意見がありました。地域を捉える視点に関しては、私の視点からを大切にしたいという意見と、ほかの視点から考えることが必要であるという意見がありました。あとは、自分が生きている場所に責任を持つということによってつながりが生まれて、それがその地域の問題を解決するために必要であるという意見が出ました。

(6班) 僕たちのグループ4人の、私たちにとっての地域学とは何なのかというのを出していったことをまとめます。まず、地域って改めて何なんだろうという議論になったとき、そこには必ず人がいて

つながりがある。けれども、そのつながりは人だけでなく、自然とか科学とかいろんなものとのつながりである。そしてそれらは、全ての基盤になっていて、そのつながりの相互作用の中で人は生きているということが改めて地域から考える利益だと考えました。この地域学からの学びをどのようにして学んでいくのかということ考えたとき、例えば社会の流れ、例えば歴史の流れ、他には客観性と主観性、そして人の生き方とか、いろんな面を学ぶ上で地域は核になるのではなかという意見が出てきました。祝島の話でも地域住民の生活のあり方が実際自分のものとは違って、そこから生き方を学んでいくという意味でも、地域が核になっている。では、地域学を学んだことで、どのような結果が得られるのかということ議論したとき、多様性を知ることができるのか、世の中の見方を広げてくれるのか、自分たちのリアルに落とし込むことができるのか、新たな価値観を見出すことができるのか、結局のところ、これから自分たちがどのような時代を生きて、そして自分らしく生きるためには、どのような生き方があるのかということ学ぶことができるのではないかな。しかも、生きるってことはもちろん自分の豊かさについて考えることでもあるんですけど、人に与えたりするということもある。つながりを考えることで、人の生き方を学べるのが地域学なのかなという結論に至りました。

(7班) 私たちのグループはいろんな意見が出て、幾つかのセクションに分けました。1つは、今まで自分が気づけなかったり、見えてこなかったつながりが発見できる学問だと地域学を考えました。あとは地域を自分に置き換えて自分を見つめ直したり、または自分を形成したりすることができる学問だと地域学を考えました。

(8班) 8班では地域学というものは、自分の生活を構成するものの再発見、再認識を行うことなのではないかな。そして、例えば学者とかITCの起業家とかが生活知と学問とをつなげて実践知をうまく扱うときに必要となる学問なのではないかなという意見になりました。そして、再発見・再認識を行う際に、人を見て人に学ぶこともあるし、人との関係性の中から地域というものが再認識できることもあるの

ではないか。科学知と生活の知のあり方も、また関係性のなかから考えられるのではないかというところが話にはなりました。

(9班) 9班では、ウチ、ソト、ヨソの関係性を、共存しているというように別々に考えるのではなく、私たちという一括りとして考えたり活動したりするという考え方。あとは、出会いや気づきから新しい知識をつくることで、その生活から何を大切にしているかを把握し、そこから地域について考えること。さらに、自分の生き方だったり、自分が地域とどうやってかかわっていくかということを考えること。地域学とは、そういうものなのではないかと考えました。本当にそれぞれの意見が出たんですけど、私にとっての地域学というテーマなので、皆の意見をひとつにまとめる必要がないと考えて、その自分にとっての地域学いうものを、それぞれが思ったことを考える機会にしました。

(村田) ありがとうございます。では、これで総説Bを終わります。15回お疲れさまでした。しっかりと地域学と一緒に向き合ってくれたことを感謝し

ております。どうもありがとうございました。

文献

- 内山節・藤田安一・畑千鶴乃・福井恒美・川井田祥子・竹内潔・新谷陽香・盛田美優・飯田菜生・釜田朋夏・小林あまね 2019「地域学研究会第9回大会—地域課題と知のクロス『私』と『地域学』」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』16巻1号 pp. 1-48
- 仲野誠 2011「生きられる地域のリアリティー—反省の学としての地域学を目指して」『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房 pp. 104-125
- 柳原邦光・光多長温・家中茂・仲野誠編 2011『地域学入門—〈つながり〉をとりもどす』ミネルヴァ書房
- 柳原邦光 2017「地域学講義」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』14巻1号 pp. 215-233
- 柳原邦光 2019「地域学講義2」『地域学論集：鳥取大学地域学部紀要』15巻2号 pp. 1-17

地域学総説 A : 想像力としての地域学

1 回	4 月 10 日	藤井 正	空間という想像力
2 回	4 月 17 日	柳原 邦光	私の地域学のつくり方
3 回	4 月 24 日	松本 薫 (小説家)	「普通」という呪縛 — 時代の子としての文学 —
4 回	5 月 8 日	山舗 智也 (連続起業家)	シリコンバレーからみる日本 — 「ニーズ」から考える価値 —
5 回	5 月 15 日	丹間 康仁 (帝京大学教育学部准教授/ 生涯学習・社会教育学)	学校統廃合からみる地域と子どもの教育のいま
6 回	5 月 22 日	松永 晴子 (NPO 国境なき子どもたち職員)	「居場所」をつくる — 難民キャンプにおける情操教育の現場から —
7 回	5 月 29 日	瀬瀬 あや (映画監督)	大切にしてきたもの、大切にしたいものをえがく — 生きものと日々接する人々の暮らしから —
8 回	6 月 5 日	地域学部教員によるまとめ	想像力としての地域学とは

地域学総説 B : 暮らしの場からの再検討

9 回	6 月 19 日	アレクサンダー・ギンナン	暮らしの場の規定要因の検討① — グローバリゼーションとはなにか —
10 回	6 月 26 日	服部 真治 (鳥取大学地域学部特任教員、 医療経済研究機構研究部研究員兼研究総務 部次長/介護保険制度・地域包括ケアシ ステム)	暮らしの場の規定要因の検討② — 制度と生活の間で (地域包括ケアを中心に) —
11 回	7 月 3 日	大住 克博 (鳥取大学農学部フィールドサイエン スセンター/林学)	暮らしの場の規定要因の検討③ — 自然と人間の関係史 (森林を中心に) —
12 回	7 月 10 日	岡村 知子 × 東根 ちよ	松本薫講義の再検討
13 回	7 月 17 日	佐々木 友輔 × 大元 鈴子	瀬瀬あや講義の再検討
14 回	7 月 24 日	児島 明 × 武田 信吾	松永晴子講義の再検討
15 回	7 月 31 日	村田 周祐 × 稲津 秀樹	想像力としての地域学にむけて — 暮らしの場からの再検討 —